

# 関東平野における三峰信仰の展開

## 武蔵国東部を中心に

三 木 一 彦\*

### The Development of the Cult of Mitsumine in the Kanto Plains, with the particular focus on the East Musashi Province

Kazuhiko MIKI

要旨：江戸時代には寺社参詣を目的とする代参講が各地で盛んに結成された。本稿では、そうした代参講による参詣地の一つであった三峰山（武蔵国秩父郡）への信仰について、その関東平野への展開を、とくに武蔵国東部に焦点をあてながら検討した。

武蔵国東部では、江戸時代に新田開発の進展がみられ、村落部の三峰信仰は農業に関わる願意をもっていた。しかし、時期が下るにつれて、むしろ火防・盗賊除けといった都市的な願意が表面に出てくるようになった。この理由として、街道沿いの宿場町などが三峰信仰の拠点となり、そこから都市的な信仰が村落部へも浸透していったことがあげられる。また、三峰講の組織形態を他講と比較すると、当該の村や町との地縁との関わりの密接度において中間的な性格を示していた。このように、三峰信仰は都市・村落両面の性格をあわせもちながら、武蔵国東部など関東平野へ展開していった。

キーワード：三峰信仰 関東平野 武蔵国 講

#### はじめに

##### (1) 本稿の目的

日本の町や村における信仰をとらえる際には、その地に所在する寺社やそれに関わる行事のほか、各地の寺社に対する参詣やそのための組織を考慮に入れることが不可欠である。そうした寺社参詣のためにつくられた組織が代参講であり、江戸時代には伊勢講をはじめとする代参講が各地で盛んに結成された。とくに関東地方では、18世紀以降、大山・榛名・三峰といった域内の寺社を対象とする代参講が数多く結成されるようになり、今日に至るまでその活動が継続しているものもある。

こうした代参講では、毎年1回、講員のう

ちの何名かが該当の寺社に講の代表として参詣を行ない、全員が参詣した時点で講が再結成されることが一般的である。この代参講の方式は、講員全員が順々に参詣でき、寺社にとっても安定して参詣者が確保できるということ、広く浸透していった<sup>1)</sup>。なお、代参講への加入は原則として1軒に1人であった。

本稿で取り上げる三峰山は、武蔵国秩父郡（現、秩父市<sup>2)</sup>）の荒川上流域に位置している。江戸時代には本山派修験に属して観音院高雲寺と号しており、明治期以降は三峰神社となっている<sup>3)</sup>。三峰山は、オオカミを神の使いとして信仰する御眷属信仰で知られ、三峰講では講に1枚配られた御眷属札を毎年三峰山に借り替えに行くという御眷属拝借の方式がとられてきた。また、御眷属札のほか、各戸に配られるための札もあり、現在では火防・盗賊除け・諸災除けの3枚が一組になってい

\* みき かずひこ 文教大学教育学部学校教育課程

る。

三峰信仰の展開に関して、すでに筆者は秩父地域や江戸を対象とする研究を行ってきた<sup>4)</sup>。その中で、三峰山が17世紀後期から18世紀中期にかけて秩父地域で基盤を確立し、18世紀後期以降はとりわけ江戸が三峰山にとって重要な存在になったことを明らかにしてきた。

そうした成果をふまえ、ここでは、江戸を除く関東平野における三峰信仰の展開につい

て検討を行なう。文化13年(1816)5月の三峰山参詣時の紀行文である『十方庵遊歴雑記』には、「当時は蚕にて田舎いそがしき故」参詣者が少なかったという記述がみられ<sup>5)</sup>、農閑期には村落部からの参詣者が相当数みられたことがうかがえる。また、天保15年(1844)から弘化5年(1848)にかけて三峰山が寄付を募った際の記録によれば、武蔵国で947件の寄進があった中で、江戸は31件にすぎず、ほとんどがそれ以外の地域からの寄進であっ

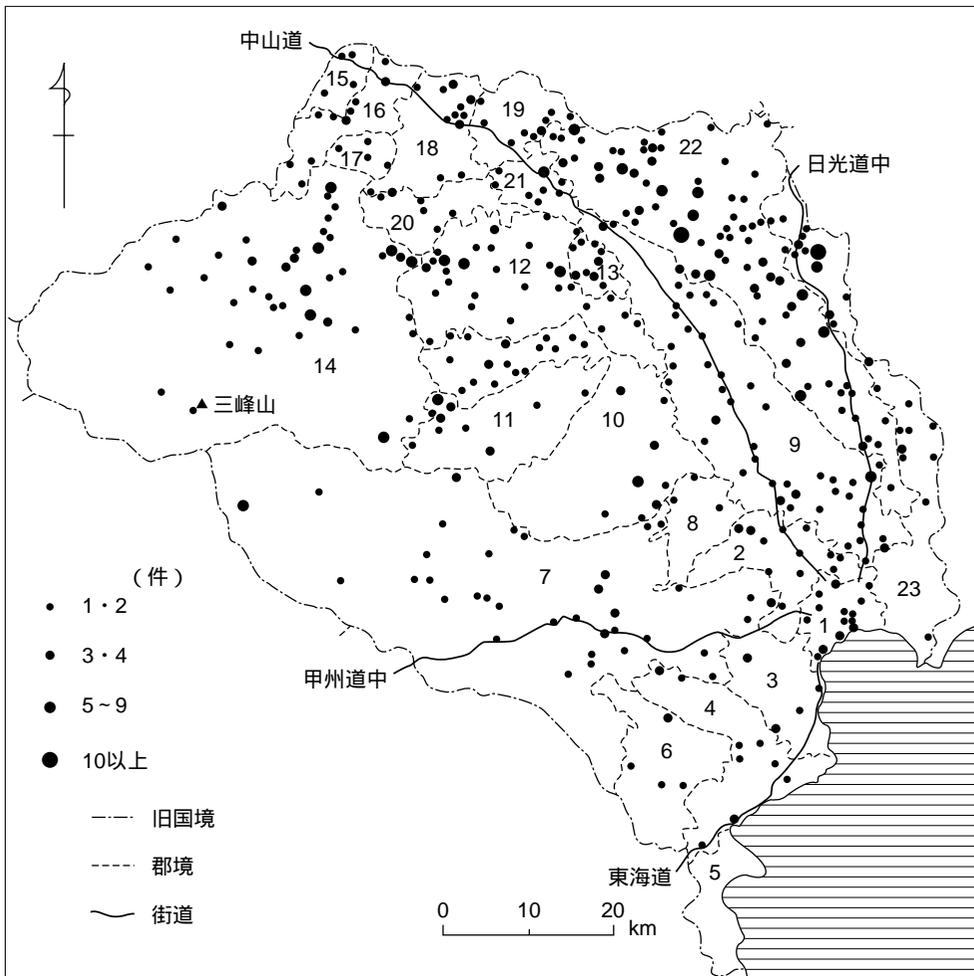


図1 三峰山への寄進件数(武蔵国内) - 天保15年(1844)~弘化5年(1848) -

1. 江戸 2. 豊島郡 3. 荏原郡 4. 橘樹郡 5. 久良岐郡 6. 都筑郡 7. 多摩郡 8. 新座郡 9. 足立郡  
 10. 入間郡 11. 高麗郡 12. 比企郡 13. 横見郡 14. 秩父郡 15. 賀美郡 16. 児玉郡 17. 那珂郡  
 18. 榛沢郡 19. 幡羅郡 20. 男衾郡 21. 大里郡 22. 埼玉郡 23. 葛飾郡

(三峰山博物館所蔵、「行者堂勤進帳」により作成。基図として、明治19~21年(1886~88)輯製20万分の1図「宇都宮」・「東京」・「横須賀」・「長野」・「甲府」を使用(図3も同様))

た(図1<sup>9)</sup>。郡別で件数が最も多いのは埼玉郡の229件であり、秩父郡の119件、足立郡の99件が続いている。全体としては、武蔵国東部から北部にかけて分布が稠密であることが読みとれる。

以下では、図1で寄進が多くみられた埼玉郡・足立郡と葛飾郡(56件)の3郡を武蔵国東部とし(現在の埼玉県・東京都の東部に該当)、この地域を中心としながら関東平野での三峰信仰の展開をみていく。なお、対象とする時期は主に江戸時代の18・19世紀であるが、当時の史料のほか、近年の民俗調査の成果や現地調査で得られた信仰の現況についても適宜取り上げることで、信仰のありようをさぐっていきたい。

研究の手順としては、次節で三峰山への願意がどのようなものであったのかをみた上で、武蔵国東部やこの地域の代参講についての概観を行なう(第 章)。そして、いくつかの町や村を事例として三峰信仰の展開を検討し(第 章)、最後に関東平野における三峰信仰の展開の特徴について考察することとする。

## (2) 三峰山への願意とその変容

江戸時代における三峰山への願意については、当時の随筆・紀行・地誌などから読みとることができる<sup>7)</sup>。そのうち、村落部の農業と関わる利益としては、猪鹿除けや虫除けが知られており、例えば、安永9年(1780)頃の『武蔵演路』には、「曾て狼ありて田畑を守護し諸獣を入れず、其神妙数知らず」とある<sup>8)</sup>。農作物に被害を与えるイノシシやシカをオオカミが食べるという関係から、農民にとっての益獣としてオオカミへの信仰が存在していたことがわかる。

三峰山への御着属拝借史料の初出とされる宝暦4年(1754)の印旛郡神門村(現、佐倉市)と同郡戸神村(現、印西市)の願書の場合も<sup>9)</sup>、両者ともに田畑の猪鹿除けと盗賊除けが願意とされている。また、関東平野の域外になるが、伊勢国小俣上ノ村(現、白山町)から宝暦6年(1756)に出された願書でも、

「近年猪鹿作物を荒シ難儀仕候」を理由として、田畑の所在地を記し、「田畑作物荒シ不申候様ニ、猪鹿御除ケ」を願っている<sup>10)</sup>。三峰山では、蚕の成長や五穀成就を祈禱する護摩が行なわれており<sup>11)</sup>、村落部からの信仰にこたえていた。

三峰信仰の村落部への影響のあらわれとしては、三峰山と村の休日との関わりがあげられる。例えば、幕末期の豊島郡徳丸本村(現、板橋区)には、「三峰山正月」と称する休日が存在していた<sup>12)</sup>。また、三郷市高須(旧、葛飾郡高須村)では、降雨時に「雨降り正月」として農作業を休み、三峰講の行事を行なうことがあった<sup>13)</sup>。

一方、江戸をはじめとする都市では、火防と盗賊除けが代表的な三峰山の利益であった<sup>14)</sup>。弘化2年(1845)に千住宿(現、足立区)氷川社末社の三峰社が再建されたときの「三峰山社略縁起」では、「宿内信心の講中火災盗難為消除、御着属を奉拝(読点は筆者による)」<sup>15)</sup>と火防・盗賊除けがうたわれている。明治3年(1870)に佐倉新町(現、佐倉市)で結成された三峰講も、町の火災をきっかけに火防の神をまつることを願意としていた<sup>16)</sup>。

すでに述べたように、今日、三峰神社から講の加入者に渡される札は、火防・盗賊除け・諸災除けの3枚であり、江戸時代に広くみられた農作業に関わる願意は、表面的にはあらわれない。この理由としては、明治期以降、都市部での三峰信仰がいっそう盛んになったことと合わせて、都市の火防・盗賊除けといった願意が徐々に村落部にも広まっていたことが考えられる。文久元年(1861)に猿島郡神田山村(現、坂東市)の妙音寺に建てられた三峰山碑には、「火防・盗賊除」と刻まれている<sup>17)</sup>。三峰信仰は、関東地方のほか、甲斐・信濃の両国でも広く浸透したが、島崎藤村が小諸町(現、小諸市)での体験をもとに著した『千曲川のスケッチ』でも、村落部の馬小屋に貼られた盗賊除けの三峰山の札についての記述がある<sup>18)</sup>。これらを考え合わせると、幕末期から明治期にかけて、三峰信仰

の願意の面で、村落部の「都市化」が進んだということができよう<sup>19)</sup>。

### 武蔵国東部の概観

#### (1) 地域の概要

本稿で主として扱う武蔵国東部(図2)は、江戸時代初期まで利根川や荒川の下流域とな

っており、居住や耕作に適さない低湿地が広い面積を占めていた。17世紀に関東郡代の伊奈氏の手によって、利根川の東遷や荒川の西遷(それぞれ承応3年(1654)・寛永6年(1629)に完工)をはじめとする大規模な工事が行なわれ、この東部低地を開発するための条件が整えられていった。

ほぼ現在の埼玉県に該当する武蔵国内の16

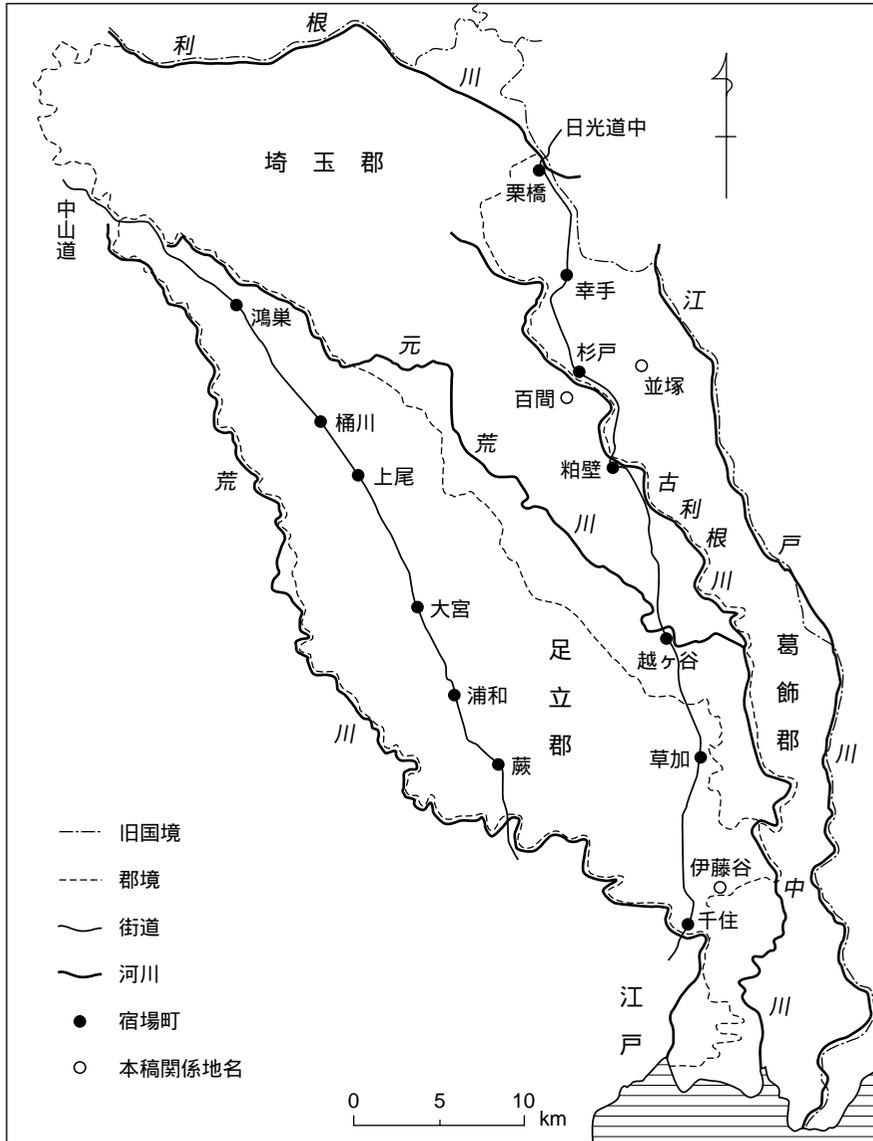


図2 武蔵国東部概略図

(基図として、明治20・21年(1887・88) 輯製20万分の1図「宇都宮」・「東京」を使用)

郡についてみると、正保年間（1644～48）から元禄年間（1688～1704）までの約50年間に村の数が403カ村増加しており、17世紀後期における新田開発の進展を物語っている<sup>20)</sup>。このうち足立・埼玉・葛飾郡の増加村数は、それぞれ71カ村・58カ村・77カ村であり、3郡を合わせると206カ村となっており、この時期の武蔵国16郡の増加村数の半数を占めている。これは、それまでおおむね自然堤防上に限られていたこの地域の集落が、用排水の整備とともに低地の中央部にも進出するようになり、その結果として村落が急増したことを示している<sup>21)</sup>。もっとも、こうした立地条件ゆえに、新田開発後も用排水の管理や洪水への備えは村にとって非常に重要であった。

江戸時代に作られた全国的な米の番付では、その上位に「武州越ヶ谷米」（現、越谷市）・「武州忍蔵米」（現、行田市）・「武州葛西米」（現、葛飾区・江戸川区）・「御蔵松伏米」（現、松伏町）・「武州新方米」（現、春日部市・越谷市）<sup>22)</sup>があげられており、当時の武蔵国東部が米の産地として著名であったことがうかがえる<sup>23)</sup>。東部低地では、米のほか、大麦・大豆・小麦などが主要な作物となっており<sup>23)</sup>、これらの穀物が江戸や近隣の町に出荷されることもしばしばみられた。また、この地域のうち、とくに江戸に近い南部は江戸への野菜供給地としての性格を有していた。これは、東部低地南部が江戸との距離の近さ、なかんずく江戸との水運の便に恵まれていたことによる。低地を流れる江戸川・中川などの諸河川を通して農産物が江戸へ出荷され、逆に江戸の尿尿が肥船で村々へ供給されて重要な肥料となっていた<sup>24)</sup>。

一方、陸上交通の面でも江戸を中心とした街道が整備され、武蔵国東部には五街道のうち日光道中と中山道が通っていた（図2参照）。表1は、武蔵国東部の範囲内に含まれるこの2街道の宿場町とその軒数をまとめたものである。軒数の数字は、文化・文政年間（1804～30）に編纂された『新編武蔵風土記稿』（以下、『風土記稿』とする）に基づいており、日光道

表1 『新編武蔵風土記稿』による各宿場町の軒数（足立・埼玉・葛飾郡内）  
- 文化・文政年間（1804～30） -

街道名	郡名	宿名	軒数
日光道中	足立	千住	1,055
		草加	559
	埼玉	越ヶ谷	549
		粕壁	880
	葛飾	杉戸	330
		幸手	815
		栗橋	419
中山道	足立	蕨	430
		浦和	208
		大宮	200
		上尾	170
		桶川	250
		鴻巣	490

（『日本地誌6』、p.286により作成）

注）千住宿のみ筆者の集計による。  
各宿場町の位置は図2を参照。

中の宿場町の軒数が相対的に多いことがわかる。こうした宿場町は、周辺村落の市場町としての機能も果たしており、上記のような穀物や野菜の取引地として、村落と密接な関わりをもっていた。

## （2）代参講の分布と三峰講

この地域の代参講の分布状況を網羅的に示した民俗調査の報告として、『埼玉のまつり・行事』におさめられた一覧がある<sup>25)</sup>。この調査で対象となっているのは、埼玉県内の旧、埼玉郡・葛飾郡域のうち埼玉郡北部（明治期の北埼玉郡域）を除く範囲であり<sup>26)</sup>、市町村によって調査の精粗に差があるものの、東部低地における代参講の全般的な概況を把握することが可能である。

それによると、この地域で最も数が多かった代参講は榛名講（196講）と大山講（190講）であり、板倉講（140講）がこれに次いでいる。これらの3講では、雨乞い・嵐除け・雹除けなど農業に関わる信仰が中心となっており、受けてきた札を田畑や村境に立てる例の多いことが報告されている。三峰講（57講）は、御岳講（62講）に次いで第5位であり、火防や盗賊除け、あるいは害獣除けの信仰を集めている<sup>27)</sup>。なお、葛飾郡本郷村（現、杉

戸町)では、嘉永7年(1854)に武州御岳山の御師が三峰講の御着属札を取り上げて持ち帰るといふ事件が起こっている<sup>28)</sup>。御岳山もオオカミに関わる信仰をもっており、同種の信仰が競合する場合もあったことがわかる。一方、火防の信仰に関しては、ほかに秋葉講<sup>29)</sup>(55講)や古峰講(27講)がみられる。

さらに、既往の研究によってこの地域における三峰講のあり方をあたってみると、村と密接に結びついているものと、村の範囲をこえて結成されているものの2つに大別することができる。前者にあてはまるものとしては、岩槻市(現、さいたま市)谷下(旧、埼玉郡谷下村)の例があげられる。ここでは、原則として全戸加入で大山・榛名・戸隠・三峰・古峰の各講が行なわれ、2月末にすべての講の代参者を同時に決定していた<sup>30)</sup>。一方、後者の例としては、安政元年(1854)に葛飾郡金町村(現、葛飾区)の貴宝院が先達となって結成された五百人講がある。これは金町村とその周辺の計11町村の世話人によって結成され、1年に50人ずつ三峰山に参詣するという大規模な講であった<sup>31)</sup>。金町村には水戸佐倉道が通っており、この街道が三峰信仰の浸透にとって媒介の役割を果たしたとみることができる。

武蔵国東部で三峰講の結成年代が確定できるのは、後でふれる葛飾郡並塚村(現、杉戸町)で享和元年(1801)<sup>32)</sup>、埼玉郡木曾根村(現、八潮市)で文化3年(1806)である<sup>33)</sup>。また、春日部市域での神社調査によれば、八丁目(旧、葛飾郡八丁目村)の八坂香取稻荷合社境内の三峰石祠に文化10年(1813)、銚子口(旧、同郡銚子口村)の香取神社境内の同石祠に文政元年(1818)の年号が各々刻まれている<sup>34)</sup>。これらの例から、19世紀初期には三峰講の結成や末社としての三峰社建立が形となってあらわれており、それに先行する18世紀中期ないし後期からこの地域に三峰信仰が浸透していったことが推察される。

こうした概観をふまえ、次章ではこの地域における三峰信仰の展開を、いくつかの事例

を取り上げることで検討していきたい。

### 武蔵国東部における三峰信仰

図3は、『風土記稿』によって、武蔵国各地の寺社に祀られた末社としての三峰社の分布をあらわしたものであり、19世紀前期の状況を知ることができる。これによれば、秩父郡をはじめ、三峰山の近くでは末社の存在が少なく、江戸の周辺と武蔵国東部に集中して分布していることがわかる。また、日光道中・中山道の沿道やその近辺に比較的多くみられることも指摘できる。

その街道の一つである日光道中について、『風土記稿』にやや先行する寛政年間(1789～1801)に編集された『日光道中分間延絵図』(以下、『日光道中絵図』とする)にあらわれた三峰社を表2に示した<sup>35)</sup>。表のうち、千住宿(2社)・大沢町(越ヶ谷宿と一体化していた)・粕壁宿・杉戸宿の5社の所在地が宿場町であり、宿場町が三峰信仰にとっての一拠点となっていたことが垣間見える。

以下では、そうした日光道中の宿場町のうち、杉戸宿・千住宿とその周辺の三峰信仰に焦点をあててみたい。

#### (1) 杉戸宿とその周辺の三峰信仰

杉戸宿(現、杉戸町)は、日光道中で江戸から5番目の宿にあたる(図2・表1参照)。表2では、杉戸宿の鎮守の一つである愛宕社の末社として三峰・天神・荒神・稻荷があげられている<sup>36)</sup>。

この杉戸宿とその周辺で三峰信仰が盛んであったことは、元治元年(1864)に三峰山の表参道に建てられた丁目石からも知ることができる。この丁目石は、52丁とされた三峰山表参道の一丁ごとに道標として建てられたもので、判明分について奉納者名とその在所を表3に示した。三峰山上にあたる52丁目の丁目石は他のものよりも大きく、ここに名を刻んだ埼玉郡爪田ヶ谷村(現、白岡町)の蓮見源重郎と同百間台越村(現、宮代町)の野口

関東平野における三峰信仰の展開

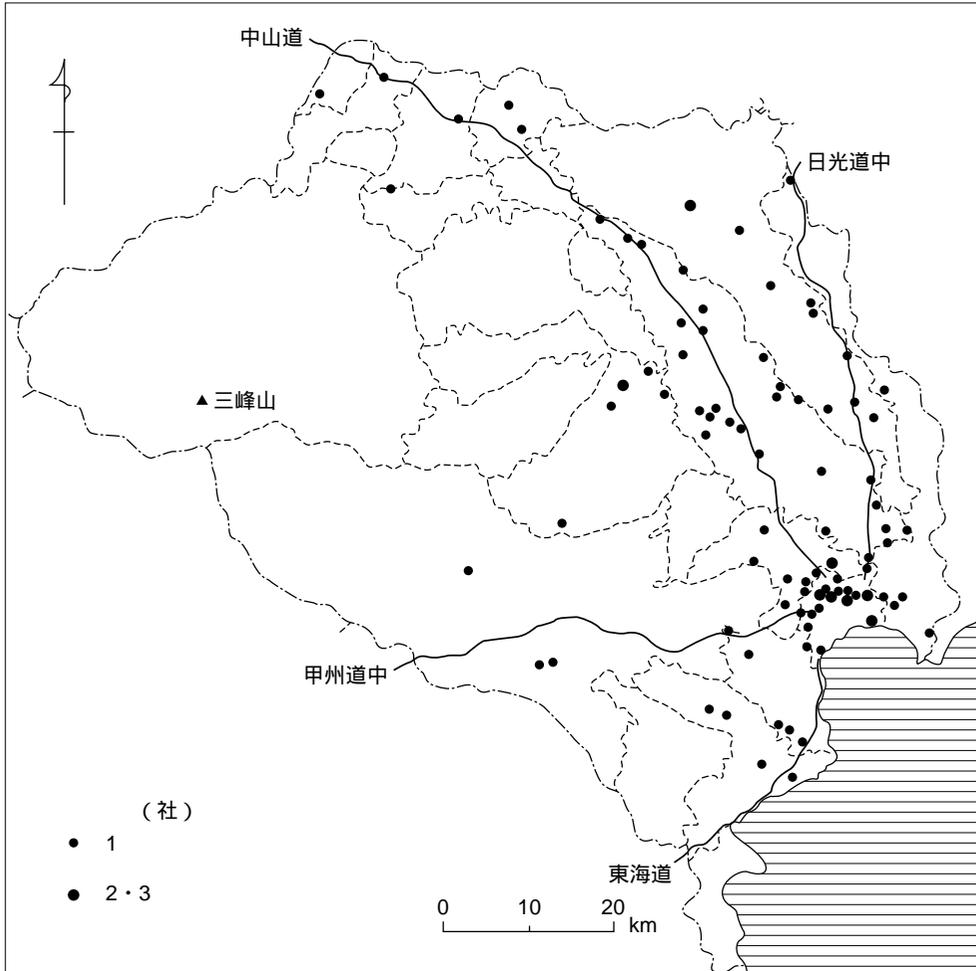


図3 武蔵国における三峰末社の分布 - 文化・文政年間 (1804 ~ 30) -  
 (『新編武蔵風土記稿』により作成)

表2 日光道中沿道の三峰社 (武蔵国内) - 寛政年間 (1789 ~ 1801) -

所在地	寺社名 (宗派)	備考
千住掃部宿	氷川社	末社に三峰 (他に閑屋天神・弁天・不動)。
千住二丁目	氷川社	末社に三峰 (他にに狛瘡神)。
大沢町	弘福院 (真言)	末社に三峰 (他に稲荷・弁天)。
大畑村	西光院 (浄土)	末社に三峰 (他に天王・熊野・女体権現)。
粕壁宿	三峰社	末社に第六天・天神。
百間村	西光院 (浄土)	末社に三峰 (他に五社権現・天神・稲荷・弁天・聖天・雷電・東照宮・三島明神)。寺中多数。
大寿院新田	三峰社	単独で立地。
杉戸宿	愛宕社	末社に三峰 (他に天神・荒神・稲荷)。
上高野村	天王社	末社に三峰 (他に虚空蔵・稲荷2・神明・天神・庚申)。

(『日光道中分間延絵図』により作成)

表3 三峰山表参道丁目石一覧(判明分のみ)  
- 元治元年(1864) -

丁目	在所	寄進者名
1	埼玉郡百間台越村	油屋丈左衛門
12	日光道中杉戸宿組	油屋仲間中
14	同上	同上
22	日光道中(以下不明)	(不明)
25	日光道中粕壁宿	国田屋七右衛門
28	同日光代(以下不明)	斎藤甚右衛門
31	埼玉郡百間山崎村	上原定五郎
32	埼玉郡百間西原村	斎藤七平
	百間本郷	金子源吾
	同所	同儀八
34	埼玉郡爪田ヶ谷	川野岩五郎
35	日光道中三本木宿	大橋源右衛門
		鈴木与六
		小山重次郎
36	幸手領倉松邨	栗原又右衛門
42	埼玉郡百間台越村	野口丈左衛門
43	同上	同上
44	香取郡小見川	鈴木達治
47	(不明)	加藤福次郎
52	埼玉郡爪田ヶ谷	蓮見源重郎
	埼玉郡百間台越村	野口丈左衛門

(現地調査により作成)

丈左衛門が丁目石奉納にあたって中心的な役割を果たしたとみられる<sup>37)</sup>。この表にあらわれる地名は、ほとんどが杉戸宿とその南隣の粕壁宿を中心とした範囲にあり、町や村の枠組を越えた広域的な連携を基盤とした奉納が行なわれていたと考えられる。

#### 埼玉郡百間村

表3に多くみえる百間村は、古利根川を挟んで杉戸宿に隣接する村である(図2参照)。百間村は、江戸時代に新田開発が進められたところで、その進展にともなって元禄8年(1695)には東村・中村・中島村の分村が行なわれた。さらに享保年間(1716~36)以降、笠原沼の干拓などによって数力所の持添新田が開かれ、もともとの百間村内も多くの組に分けられた<sup>38)</sup>。ここでは、上記3村の分村を含めて百間村として扱う。

百間村の旧家である新井家と加藤家には、多数の守札が残されており、その調査報告が出されている<sup>39)</sup>。それを寺社ごとにまとめたものが表4であり、三峰山は合計で第3位、新

表4 宮代町新井家・加藤家における守札の  
寺社別一覧(両家の合計が30枚以上のもの)

寺社名	新井家	加藤家	計
大山阿夫利神社	670	36	706
成田山新勝寺	202	177	379
三峰神社	293	31	324
榛名神社	239	22	261
大宮氷川神社	226	25	251
富士浅間神社	112	91	203
伊勢神宮	81	107	188
* 宝生院	145	-	145
川崎大師	97	1	98
* 姫宮神社	36	52	88
京都愛宕神社	86	-	86
出羽三山	81	-	81
大宮秋葉神社	76	4	80
* 西光院	76	-	76
板倉雷電神社	45	15	60
幸手雷電神社	22	36	58
笠間稻荷神社	48	7	55
鷲宮神社	27	28	55
杉戸至宝院	51	-	51
筑波山神社	27	19	46
熊野三山	44	-	44
賀蘇山神社	43	1	44
鹿島神宮	36	6	42
岩槻大善院	33	-	33
東京水天宮	31	-	31
日光山	30	1	31
金刀比羅神社	24	6	30
上記計	2,881	665	3,546
総計	3,927	881	4,818

(『宮代町史資料9』, pp.16-21により作成)  
注) 寺社名は現在名。\*は宮代町内の寺社。

井家に限れば大山に次ぐ第2位の札数となっている。順位について単純に比較すれば、先述した民俗調査の結果よりも三峰山が上位になっており、武蔵国東部の中でもこの杉戸宿一帯で三峰信仰が盛んであったことの例証となっている。

『日光道中絵図』には、百間村(東村)の西光院にある末社の一つに三峰社が描かれている(表2参照)。また、明治12年(1879)に作成された「神社明細帳」では、もともと西光院の末社であった五社神社の境内社として三峰社(2社)があったほか、百間村の鎮守である姫宮神社の境内にも三峰社があったことが判明する<sup>40)</sup>。このうち、五社神社の氏子圏では、地区単位でいくつかの三峰講が結成

されている。そして、五社神社境内の三峰社のうち片方は神社の所在する東地区の所有で、地区の三峰講が借りてくる御着属札を祀るためのものである<sup>41)</sup>。また、西地区では、4月に三峰山への代参を4人で行ない、第二次世界大戦中まではその4人の家を会場として1・3・5・9月の18日に「オトキ」と称する講員の会食を行っていた<sup>42)</sup>。

もう一方の姫宮神社では、同神社の神主が講元となって三峰講を行っていた。講の範囲は姫宮神社の氏子圏であり、講員数はかつて50名であったので五十人講と呼ばれていた(その後、講員数は55名となった)。ここでは、神主が各戸分の札を配る際に講金と米を集め、その米を神社境内の三峰社に毎月19日に供えるなど<sup>43)</sup>、神主が講において中心的な役割を果たしていた。この氏子圏内の姫宮地区や西原地区では、三峰講が任意参加であるのに対し、地区単位で結成された榛名講と大山講が地区の付き合いの一環に位置付けられており<sup>44)</sup>、同じ代参講でも組織形態に違いがみられることが注目される。

#### 葛飾郡並塚村

杉戸宿東方の葛飾郡並塚村(図2参照)に関しては、享和元年(1801)から昭和18年(1943)までの講員数や代参人数を書き留めた三峰講の記録が残されている(表5)。この三峰講の由来については、「享和元年三月二十日、並塚村前新田株田中氏畑地五歩ヲ借受テ」三峰社を祀り、「同時二五十名ノ代参講ヲ組織シテ是レヨリ二名立ノ代参講ヲ新設ス」とあ

表5 並塚三峰講の沿革

年代	人数	代参人数
享和元(1801)～文政6(1823)	50	2
文政7(1824)～嘉永元(1848)	50	2
嘉永2(1849)～明治6(1873)	50	2
明治7(1874)～明治31(1898)	50	2
明治32(1899)～大正13(1924)	50	2
大正14(1925)～昭和8(1933)	63	7
昭和9(1934)～昭和18(1943)	100	10

(三峰山博物館所蔵、「並塚三峰神社新築年号并講社調書」により作成)

り、世話人は田中国治郎・<sup>あかる</sup>耀清右衛門・三ヶ尻太郎兵衛・大里甚蔵の4名であった<sup>45)</sup>。この記録によれば、上の4家は明治期に至るまで一貫してこの三峰講の世話人を務めていた。この講は並塚・<sup>さいぼ</sup>才羽百人講として現在も継続しており、三峰社も世話人の田中家の隣地に現存している。田中家は、江戸時代に浪人として並塚村に住むようになったと伝える家で、地主であり、かつては榛名講の世話人を兼ねていたこともあった<sup>46)</sup>。また、講の世話人のうち、耀家は才羽村(現、杉戸町)に居住しており、講員にも並塚村・才羽村両村の住民がいた<sup>47)</sup>。この両村は、17世紀に武蔵国東部低地の開発が進められた際に生まれた村で、開発当初は並塚新田・才羽新田と称されていた<sup>48)</sup>。『風土記稿』によれば、並塚村は72戸、才羽村は84戸であった<sup>49)</sup>。

天保10年(1839)の並塚三峰講の「三峰山勸進帳」によれば<sup>50)</sup>、この講から76名の寄進がみられ、別に(田中)国次(治)郎・(耀)清五郎・(大里)甚蔵・(三ヶ尻)多(太)郎兵衛の世話人4名は連名で金3分を寄付している。このときの寄付額と人数をみると、銭500文が54名、金2朱が17名と、この両者がほとんどを占めている(他に金1分が3名、銭1貫文・748文が各1名)。この数字から、ほとんどの人が横並びで寄進を行っていたことがうかがえる。ちなみに、このときの寄進者数は50名の講員数をこえており、正規の講員以外にも寄付を募ったという可能性が考えられる。金1分を寄付した(田中)安左衛門は、田中国治郎の跡を継いで三峰講の世話人となっており、同じ家でも親子などで別々に寄付を行なうこともあったとみられる。

#### (2) 千住宿とその周辺の三峰信仰

##### 千住宿

千住宿は、江戸から出た日光道中の最初の宿であり(図2参照)、宿内で水戸佐倉道が分岐していた。表1に示したように軒数が多く、品川宿・板橋宿・内藤新宿とともに江戸四宿の一つであった。『風土記稿』によれば、「左

右に旅亭商家軒をならべて、旅人絶ゆることなく尤賑はへり、享保（1716～36）の頃より毎朝市をたて、五穀野菜或は川魚等をひさぐものの日に盛なり、故に明和年中（1764～72）より各其問屋を立て税を斂む（西暦とふりがなは筆者による）」とあって<sup>51)</sup>、18世紀以降、単なる宿場町としてだけでなく、前章でふれたような農産物の集散地としても大いに賑わうようになっていた。また、荒川（隅田川）に面しているため、その上流から筏で輸送される材木を扱う店も多かった<sup>52)</sup>。千住宿の内部は、南から千住掃部宿・千住一～五丁目というように分かれていた。

『日光道中絵図』では、千住宿に2つの三峰社が描かれている（表2参照）。このうち、千住二丁目の氷川社（現在は稲荷社と合祀されて千住神社となる）については、三峰社など諸末社の縁起が残されている。これは弘化2年（1845）に氷川社・稲荷社や諸末社の再建がなった際に、千住二丁目の役人を務めていた永野彦右衛門が諸社の縁起を記したものである<sup>53)</sup>。第 4章で述べたように、氷川社末社として火防・盗賊除けのために三峰社が祀られ、祠と一對の御着属像がつくられた<sup>54)</sup>。この御着属像は現存しており、弘化2年の年号と、発起人（永野彦右衛門）・世話人（3名）の名が刻まれている。

このほか、『風土記稿』の千住掃部宿源長寺（浄土宗）の項には、「本尊弥陀は慈覚大師の作にて、もと秩父郡三峰山に納し火盗両難除の像なりといへど、当寺に伝来する故を詳にせず」と記されている<sup>55)</sup>。さらに、同じ掃部宿の氷川社末社の三峰社（表2参照）と合わせ、18世紀後期から19世紀前期にかけての千住宿において三峰信仰がかなり浸透していたことがわかる。その一因として、千住宿が秩父と江戸を荒川によって結ぶ経路上に位置していたことがあげられよう。

#### 足立郡伊藤谷村

伊藤谷村は千住宿の東郊に位置し（図2参照）、現在の足立区綾瀬一丁目におおよそ該当

する（図4）。江戸時代に村名主を代々務めてきた吉田四郎平家が開発したと伝える地で、その時期は荒川の西遷によって綾瀬川の流量が安定するようになった17世紀前半と推定されている<sup>56)</sup>。このため、『風土記稿』には「近き頃まで伊藤谷新田と呼りと云」と記されており、戸数は46であった<sup>57)</sup>。米や野菜の栽培が盛んで、かつて野菜は千住市場への出荷が多く、綾瀬川には江戸から来る肥船の舟着場もあった<sup>58)</sup>。

この村の鎮守の一つである第六天社の末社に三峰社があり<sup>59)</sup>、今もこの三峰社は綾瀬神社（第六天社と氷川社を合祀）の境内に現存している（図4参照）。伊藤谷村では、名主の吉田四郎平家の分家である吉田四郎吉家を世話人として三峰講が結成されており、幕末期からの講の記録が残っている。四郎吉家の現当主は9代目で、本家から信仰関係のことを任されてきたと伝えられている<sup>60)</sup>。現在、三峰講の講員は基本的に綾瀬神社の氏子（すなわち旧、伊藤谷村の範囲の住民）であり、3月15日の綾瀬神社春季祭時に代参者をくじ引きで決め、5月までに数名で三峰山へ代参を行なうことになっている<sup>61)</sup>。代参時に余剰金

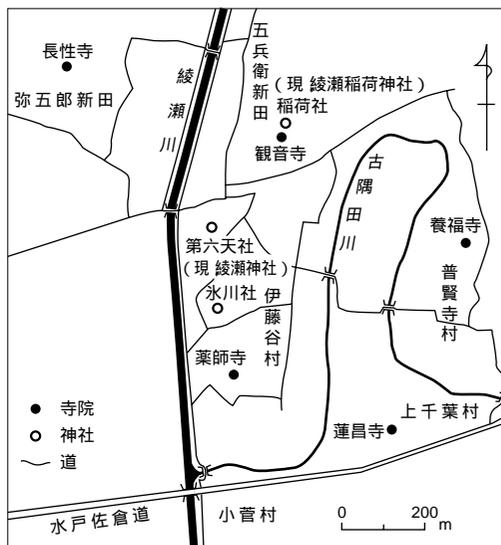


図4 伊藤谷村周辺図

（基図として、1万分の1地形図「千住」（明治42年（1909）測図）を使用）

が出れば綾瀬神社の賽銭に回すなど、三峰講と鎮守とのつながりが密接なことが特徴といえる。講記録から判明する講員数をまとめた表6にみられるように、住民の増加にともなって講員数が増加してきており、平成17年(2005)からの講員数は76名となっている<sup>62)</sup>。なお、かつてこの地区には富士講も存在していたが、現在では消滅している<sup>63)</sup>。

安政4年(1857)から明治2年(1869)までの三峰講の代参記録をもとに作成した表7によると、29名の講員が13年で1回ずつ代参するようになっている(29名のうち2名は参詣の記載なし)。代参時期はほとんどの年が2・3月(旧暦)で、現行と大きな差はない。1軒の負担額はこの時期の末期を除けばほぼ一定しており、負担も平等であった。一方、文久元年(1861)に伊藤谷村で行なわれた鎮守へ

の寄付金の記録によれば(表8)、名主の吉田四郎平家が金8両、その分家の吉田四郎吉家が金6両と最も上位にあり、家格などが寄付金額に反映していたことが示唆される<sup>64)</sup>。現在でも、鎮守の祭礼時の寄付では、本家が先に金額を決めて、それに応じて他の家の額が決められるといわれている<sup>65)</sup>。表8にあらわれる人数は47人で、先の『風土記稿』でみた伊藤谷村の軒数とほぼ一致しており、村ぐるみでこの鎮守への寄付に加わっていた。この表の右欄には三峰講への加入状況を示したが、鎮守への寄付金額が多い家を中心に三峰講への参加がみられたことがわかる。また、鎮守以外に、吉田本家の四郎平家には屋敷神として稲荷社が祀られており、二月初年の祭礼時には分家から幟の奉納が行なわれている<sup>66)</sup>。

寺院関係では、伊藤谷村内に真言宗の薬師寺があり、明治10年(1877)の寺院明細帳では、伊藤谷村の根本貞治郎・星野吉之助・伊藤徳右衛門の3名が檀徒総代になっている<sup>67)</sup>。現在でも薬師寺の檀家約500軒の約3分の1が旧、伊藤谷村内の家であるが、上千葉村(現、葛飾区)の蓮昌寺(日蓮宗)をはじめ、弥五郎新田の長性寺、五兵衛新田の観音寺、普賢寺村の養福寺(いずれも現、足立区で真言宗)など、近在の村々に檀那寺をもつ家も少なくなかった(図4参照)<sup>68)</sup>。

このような重層的な宗教組織の中、三峰講

表6 伊藤谷(綾瀬)三峰講の沿革

年代	人数	代参人数
安政4(1857)～明治2(1869)	29	2～3
明治5(1872)～明治22(1889)	36	2
明治23(1890)～	28	-
昭和7(1932)～昭和18(1943)	52	4～5
昭和19(1944)～昭和36(1961)	67	6
昭和37(1962)～昭和46(1971)	63	6
昭和47(1972)～昭和56(1981)	59	4～6
昭和57(1982)～平成3(1991)	67	6～7
平成4(1992)～平成16(2004)	75	6
平成17(2005)～	76	5

(吉田 裕家所蔵の三峰講関係文書により作成)

表7 伊藤谷三峰講の代参 - 安政4年(1857)～明治2年(1869) -

年代	出発日	1人負担額	代参人
安政4(1857)	2 / -	-	(岩崎)勘右衛門・(伊藤)亀次郎
5(1858)	3 / 26	銭260文	(吉田)幸次郎・彦右衛門
6(1859)	3 / -	銭260文	(富岡)伝兵衛・(根本)庄右衛門
万延元(1860)	2 / -	-	(田中)権平・(福嶋)伝右衛門・(福嶋)三左衛門
文久元(1861)	3 / 4	銭239文	(吉田)三右衛門・(根本)藤右衛門
2(1862)	3 / 16	銭264文	(富岡)藤兵衛・(小岩井)喜助
3(1863)	3 / -	銭260文	(小岩井)源四郎・長左衛門
元治元(1864)	3 / -	銭260文	(岩崎)市右衛門・(大森)伊兵衛
慶応元(1865)	2 / -	-	吉田(四郎平)・兼吉
2(1866)	2 / 17	銭262文	(嵯峨野)武兵衛・(福嶋)新兵衛
3(1867)	3 / 10	金1朱70文	権兵衛・(吉田)四郎吉
明治元(1868)	11 / 7	金2朱66文	(星野)七左衛門・(大塚)仁右衛門
2(1869)	-	-	(根本)佐右衛門・(白石)金左衛門

(吉田 裕家所蔵、「三峰山講中連名覚帳」により作成)

注)代参人欄の( )内は筆者による補筆。

表8 伊藤谷村における鎮守への寄付金  
- 文久元年(1861) -

金額	寄付者	三峰講
金8両	(吉田) 四郎平	
金6両	(吉田) 四郎吉	
金4両	(小岩井) 源四郎	
金3両2分	(吉田) 三右衛門	
	(田中) 権平	
金3両	(根本) 佐右衛門	
	(星野) 七左衛門	
金2両	(星野) 七右衛門	
金1両2分	(吉田) 幸次郎	
	(小岩井) 喜助	
	(寺山) 長兵衛	×
	(伊藤) 徳右衛門	×
金1両1分	(大森) 勘四郎	×
金1両	権兵衛	
	彦右衛門	
	(吉田) 利兵衛	
	(岩崎) 勘右衛門	
	(富岡) 藤兵衛	
金3分	(根本) 藤右衛門	
	弥吉	×
	(金子) 佐五兵衛	×
	兼吉	
	平八	×
金2分2朱	(白石) 金左衛門	
金2分	孫次郎	×
	(根本) 庄右衛門	
	(嵯峨野) 武兵衛	
	長左衛門	
	(伊藤) 龜次郎	
	(富岡) 伝兵衛	
	(福嶋) 三左衛門	
	(大森) 安左衛門	×
	孫右衛門	×
金1分2朱	(岩崎) 藤吉	×
	(大森) 伊兵衛	
	清五郎	×
	(福嶋) 伝右衛門	
金1分	平次郎	×
	佐平	×
	権蔵	×
	(不明) 三郎	×
	与七	×
	弥兵衛	×
	金次郎	×
	(福嶋) 新兵衛	
金2朱	孫兵衛	×
	市五郎	×

(吉田 裕家所蔵、「両社御普請出金覚帳」・「三峰山講中連名覚帳」により作成)

注1) 寄付者欄の( )内は筆者による補筆。

2) 三峰講欄の・×は、同時期における三峰講加入(表7参照)の有無を示す。

の存在意義として考えられるのは、村を地縁によって結びつける力としての作用である。伊藤谷村では、檀那寺が家によって異なっており、地縁による村内の鎮守などの祭礼では、家格や本分家関係などがかなり意識された。それに対して、三峰講では、村内の一定以上の家に限定されるとはいえ、そうした意識が比較的稀薄で、鎮守などとは別の性格をもつ地縁組織となっていたことが想定される。

伊藤谷村の北に隣接する五兵衛新田は、伊藤谷村と同様の立地条件や開発伝承をもつ村である。この地区でも以前から三峰講が結成・継続されており、現在では綾瀬稻荷神社の境内に三峰社が祀られている(図4参照)<sup>69)</sup>。この五兵衛新田では、江戸時代から富士講が組織され、江戸に本拠をおく富士講の枝講として活動を行っていたが、現在では消滅している<sup>70)</sup>。三峰講とこの富士講を比較した場合、三峰講の方が当該地区の地縁とより密着した存在形態であるといえ、三峰講が存続して今に至っている要因の一つもそこに求めることができると考えられる。

### おわりに

本稿では、武蔵国東部に焦点をあてながら、関東平野における三峰信仰の展開について検討してきた。

三峰山の御眷属信仰は、もともと村落部において猪鹿除けなど農業に関わる願意をもって受容された。江戸時代に新田開発の進展がみられた武蔵国東部でも、三峰信仰は当初そうした願意をもっていたことが想定される。しかし、こうした性格は時期が下るにつれて徐々に表面に出なくなり、都市部と同様の火防・盗賊除けの信仰として広く受容されるようになった。その要因の一つとして、江戸や宿場町などからの影響が、街道沿いに村落部に浸透していったことがあげられる。さらには、金町村の五百人講の例のように、街道に沿って周辺の村落を含んだ大規模な三峰講が結成されるという例もみられた。江戸近郊の

諸街道における流通が活発化し、宿場町と近在の村落との交流が盛んになる中で、三峰信仰もまた展開していったことがうかがえる。

18世紀以降の関東地方各地における生産・流通の進展は、いわゆる江戸地廻り経済圏の形成として知られるが、三峰をはじめ大山・榛名といった地方的な霊山への参詣の隆盛も、そうした動向と無縁ではなかったとみられる。そして、大山や榛名と比べると、願意や講の組織形態（村民の一部のみが加入するといった点）などの面で三峰はより都市的な性格が濃厚であったといえる。

しかしながら、その反面、前章の末尾でみた富士講の例に比べると、相対的に三峰講は当該の町ないし村の地縁と結びついているという性格を残している。伊藤谷村のように村単位で講が結成された場合はむろんのこと、百間村や並塚村の講でも、あくまで地縁が基盤となっていることが指摘できる。鎮守などの組織とはやや性格を異にしながらも、そうした組織と何らかの関わりをもつという、いわば地縁と不即不離の関係にあるのが、ここでみた三峰講の特徴の一つとなっている。総じていえば、三峰信仰は都市的なものと村落的なものを織りまぜつつ、武蔵国東部をはじめとする関東平野に浸透していったといえよう。

本稿で残された課題としては、こうした性格をもつ三峰講が結成・維持された背景を、より子細に考察するという点があげられる。そのためには、氏子や檀家とは異なった別の形の組織がなぜ必要になったのか、また、その組織の中心となったのがどういう人々だったのかということ、それぞれの事例に即して詳しくみていかなければならない。さらに、関東平野における三峰信仰の展開を、秩父地域や江戸におけるそれと合わせて検討することで、三峰信仰の全体像をとらえていく必要がある。これらの問題については、今後の調査・研究の中で明らかにしていきたい。

付記

本稿にかかわる現地調査では、東京都足立区の吉田 裕氏をはじめとして、数多くの方々のご協力を得ました。資料調査に際しては、三峰山博物館の皆様には便宜をはかっただけではありません。また、筑波大学歴史・人類学専攻の石井英也・小口千明・浪川健治・古家信平の各先生からは、研究の方向性について貴重なご助言を賜りました。以上、記して深く感謝申し上げます。

注

- 1) 真野俊和(1998):「代参講」、佐々木宏幹・宮田登・山折哲雄監修『日本民俗宗教辞典』、東京堂出版、p.351。
- 2) 現行の市町村名は、原則として平成17年(2005)8月時点のものである。
- 3) 「三峰」の表記に関しては、「三峯」も用いられるが、本稿では参考文献の書名等を除き、「三峰」に統一した。
- 4) 三木一彦(1996):「秩父地域における三峰信仰の展開 - 木材生産との関連を中心に - 」、地理学評論69A-12、pp.921-941。同上(2001):「江戸における三峰信仰の展開とその社会的背景」、人文地理53-1、pp.1-17。
- 5) 江戸双書刊行会編(1964):『江戸双書5』、名著刊行会、p.176所収。
- 6) 武蔵国を含むこの寄進の全容については、前掲4)、p.923、に図示した。
- 7) 前掲4)、p.924、に一覧としてまとめた。
- 8) 埼玉県編・発行(1979):『新編埼玉県史 資料編10 近世1 地誌』、p.638所収。
- 9) 「一札之事」、横山晴夫編(1998):『三峯神社史料集7』、三峯神社社務所、p.10所収。神門村・戸神村とも同じ文書表題である。
- 10) 「願書」、前掲9)、p.11所収。
- 11) 前掲5)、p.174所収。
- 12) 宮原 浩(1998):「大山御師の活動とその影響 - 村の休日視点を以て - 」、地方史研究274、p.47。なお、この村では、「三峰山正月」のほか、「榛名山正月」・「成田山正月」もみられた。
- 13) 三郷市史編さん委員会編(1991):『三郷市史9 別編 民俗編』、三郷市、p.398。
- 14) 江戸については、前掲4)、pp.4-5、で述べた。
- 15) 「旧考録」、足立風土記編さん委員会・足立区立郷土博物館編(1993):『足立風土記資料 古文書

- 史料集2 永野家文書2』, 足立区教育委員会, p.22所収.
- 16) 佐倉市教育委員会編・発行(1978):『佐倉文庫4 三峯山道中記図絵』, 冒頭.
- 17) 岩井市史編さん委員会編(2001):『岩井市史通史編』, 岩井市, p.811.
- 18) 島崎藤村(1927):『千曲川のスケッチ』, 岩波文庫, p.82. この作品は, 明治33年(1900)頃から執筆が開始された.
- 19) 明治39年(1906)に発行された『三峯山誌』にある三峯山の「靈験の実績」には, 火難守護9件, 盗難守護10件, 病難消除4件, 大難守護1件, 養蚕守護2件, 軍人守護4件があがっており, 当時, 火防・盗賊除けが利益の中心をなしていたことがうかがえる. 石倉重継(1906):『三峯山誌』, 關勝閣書房, pp.31-48.
- 20) 日本地誌研究所編(1963):『日本地誌6 群馬県・埼玉県』, 二宮書店, pp.210-211.
- 21) 前掲20).
- 22) 『諸國豊作競』, 石川英輔(2001):『大江戸番付づくし』, 実業之日本社, p.41所収.
- 23) 埼玉県編・発行(1993):『中川水系総合調査報告書2 中川水系 人文』, p.319.
- 24) 前掲20), pp.339-340.
- 25) 埼玉地区文化財担当者会編・発行(2001):『埼玉地区文化財担当者会報告書4 埼玉のまつり・行事』, p.33.
- 26) 調査対象範囲は, 栗橋町・鷲宮町・菖蒲町・久喜市・幸手市・蓮田市・白岡町・宮代町・杉戸町・岩槻市・春日部市・庄和町・越谷市・松伏町・吉川市・八潮市・三郷市である(市町村名は平成13年(2001)現在).
- 27) 前掲25), および, 前掲23), pp.916-917.
- 28) 『日鑑』, 横山晴夫校訂(2005):『三峯神社日鑑7』, 三峯神社事務所, p.298所収.
- 29) この秋葉講は, さいたま市(旧, 大宮市)の秋葉神社を対象とするものである.
- 30) 岩槻市役所市史編さん室編・発行(1984):『岩槻市史 民俗史料編』, pp.773-774.
- 31) 横山晴夫(1980):『三峯信仰とその展開』, 五来重編『山岳宗教史研究叢書14 修験道の美術・芸能・文化1』, 名著出版, pp.391-392, および, 前掲28), p.325所収.
- 32) 三峯山博物館所蔵, 『並塚三峯神社新築年号并講社調書』(昭和8年(1933)).
- 33) 八潮市編・発行(1985):『八潮市史 民俗編』, pp.669-671. なお, 武蔵国東部の域外になるが, 佐原市津宮(旧, 香取郡津宮村)の三峯講では, 天保8年(1837)からの記録が残されている. 岩沢和夫(1987):『利根川下流の三峯信仰について - 佐原市津ノ宮の中宿講 -』, 千葉県立大根博物館調査研究報告2, pp.57-61.
- 34) 春日部市教育委員会編・発行(2002):『春日部市の神社 上』, pp.53-54, および, 同上編・発行(2003):『春日部市の神社 下』, p.143.
- 35) 児玉幸多監修(1986・87):『日光道中分間延絵図1・2』, 東京美術.
- 36) 火防の利益が重なるとみられる愛宕と三峰がどのような形で並存していたのかという問題については, 今後の課題としたい. ちなみに, 中山道本庄宿(現, 本庄市)では, 鎮守の金鑽明神かなざなの末社として三峰・秋葉・稲荷が同じ祠に祀られ, 同じ沿道の金窪村(現, 上里町)では愛宕社の末社に三峰が存在するなど, 三峰と愛宕や秋葉との並存は他にもみられる. 児玉幸多監修(1978):『中山道分間延絵図4』, 東京美術.
- 37) 新井 啓(1991):『新・三峯山誌』, 零々舎, p.34, にもこの52丁目の目石に関する記述がある.
- 38) 蘆田伊人校訂(1972):『大日本地誌大系16 新編武蔵風土記稿10』, 雄山閣, p.192所収. なお, 笠原沼開拓には爪田ヶ谷村も関与しており, こうした百間村と爪田ヶ谷村の関わりが目石奉納にも関係しているとみられる.
- 39) 宮代町教育委員会編・発行(1996):『宮代町史資料9 祈りの札』, 267p. なお, 年代表記のある札で最古のものは新井家で弘化3年(1846), 加藤家で文化15年(1818)である(同書, p.6). 三峯山の札で年代表記のあるものはないが, 『三峯山大権現』といった江戸時代の表記がみられるものが相当数含まれている.
- 40) 同上編・発行(1991):『宮代町史資料1 地誌1』, pp.111-113所収.
- 41) 同上編・発行(1994):『宮代町史資料6 みやしろの信仰と年中行事』, p.81.
- 42) 前掲41), pp.88-89. 西地区では, 大山講でも「オトキ」が行われていた.
- 43) 前掲41), pp.111-112.
- 44) 前掲41), pp.105-106・p.111.
- 45) 前掲32). なお, 並塚村や百間村でみられる「五十人講」のような人数を付した名称には, 三峯講の講員数を一定数に限る意味合いがあったと考えられる.
- 46) 埼玉県杉戸町, 田中 博氏のご教示による.
- 47) 明治31年(1898)の講員名簿による住所の内訳は, 田宮村(当時)並塚2名, 同村才羽26名,

- 堤郷村（当時）堤根（現、杉戸町）2名となっている。三峰山博物館所蔵、「三峰山登山講則」。
- 48) 前掲23), pp.248-249.
- 49) 蘆田伊人校訂(1972):『大日本地誌大系8 新編武蔵風土記稿2』, 雄山閣, p. 201所収。
- 50) 三峰山博物館所蔵。
- 51) 蘆田伊人校訂(1977):『大日本地誌大系13 新編武蔵風土記稿7』, 雄山閣, p.132所収。
- 52) 佐々木 勝・佐々木美智子(1985):『日光街道 千住宿民俗誌 - 宿場町の近代生活 - 』, 名著出版, pp.173-181。
- 53) 前掲15), pp.135-139。
- 54) 前掲15)。
- 55) 前掲51), p.134所収。
- 56) 足立区立郷土博物館編(1997):『足立風土記稿 地区編6 綾瀬』, 足立区教育委員会, p.83。
- 57) 前掲51), p.158所収。
- 58) 前掲56), pp.87-90。
- 59) 前掲51), p.159所収。
- 60) 東京都足立区, 吉田 裕氏のご教示による。
- 61) 前掲60), および, 前掲56), pp.135-136。
- 62) 前掲60)によれば, 現在, 自治会や綾瀬神社の活動に積極的な人を三峰講へ勧誘するようにしているという。
- 63) 前掲60)。
- 64) 前掲56), p.87, には, かつての状況として, 「農民の多くは小作農で, 米を小作料として大地主に納めた」との記述がみられ, 鎮守への寄付金額にはこうした地主・小作関係の影響もあったとみられる。ただし, 江戸時代の伊藤谷村における土地所有状況がどのようなものであったかについては, 現時点では明らかにし得ない。
- 65) 前掲60)によれば, 綾瀬神社の役員には総代(神社の運営にあたる)と年番(祭りの準備にあたる)があり, 地主ないし自作農の家が総代になる傾向がみられた。
- 66) 前掲60), および, 前掲56), pp.84-85。
- 67) 「真言宗明細簿」, 足立風土記編さん委員会・足立区郷土博物館編(1995):『足立風土記資料 寺社2 寺院明細』, 足立区教育委員会, p.139所収。
- 68) 東京都足立区, 山崎順正氏のご教示による。
- 69) 前掲56), pp.151-152, および, 東京都足立区, 金子八十氏のご教示による。
- 70) 前掲56), pp.150-151。